

2015年7月31日（金）2校目

上演7

福島県 いわき総合高等学校

## 「ちいさなセカイ」

第39回全国高等学校総合文化祭

第61回全国高等学校演劇大会

## 講評速報

生徒講評委員会 担当委員

上野 駆宥 （三重県立四日市西高等学校）

望月 綾香 （北海道登別明日中等教育学校）

村上 さくら （大阪府立北かわち臯が丘高等学校）

この劇は、福島の高校生が3.11の地震と原発事故後に、久しぶりに文化祭を開催した経験をもとに、学校やネットなど自分の身近で起こっている問題を取り上げ、自分たちのありのままの姿や思いを伝えようとしたものであった。

劇の冒頭と最後には、スクリーンに国道6号線を走る車からの人のいない寂しい外の景色が映されていた。震災から4年が経った福島を忘れないでほしい、風化させないでほしいという願いなのではないかという意見が出た。

劇中では、舞台中央にイスを置いた教室エリアがあり、6年ぶりに文化祭を控え、出し物を考えるクラスの群像劇がくり広げられた。文化祭の話し合いはいつまでもまとまらず、クラスの一体感のない様子が何度も巻き戻されるように表現されていく。その中にクラスの中の7人の物語が挿入されて、それぞれに今を生きる高校生の悩みが描かれていた。TwitterやLINEを使い、直接向き合って話さないことですれ違いが起こったり、周りの目を気にして自分から動けなかったり、友人とどんなときでもつながって安心したかったりすることなどは実際に身の回りで起きることである。それぞれのエピソードに出てくる役に多くの講評委員が自分を重ね合わせて、また、無意識のうちに同様に接しているのではないかという恐怖までも感じた。最初のクラスの騒がしい雰囲気はただ騒がしいだけに思えたが、エピソードが進んでいくにつれてクラスの一人ひとりが問題を抱えていることが露わになっていき、ざわめきが気持ち悪く思えてきた。

舞台に教室を表すイス、自動車の座席、カラオケボックスのイスや机の代わりにボックスがあることで、めまぐるしい場面の変化が容易に想像でき、劇にたやすく入ることができた。役者の着ていたTシャツはグループごとに色が振り分けられ、クラスの中にある関係が可視化され、グループのまとまりが意識しやすいものであった。舞台背後に上から吊り下がる多くのTシャツは万国旗のようで、それは様々な場所から多くの悩みを持つ生徒が集まり、形作られる一つの教室を表しているように見えた。さらに、LINEを通してのケンカの際に通知音を役者自身が言ったり、カラオケで実際にマイクを持って客席へと降りたことは観客を大いに楽しませた。

大きな声で言わなければ届かないし、たとえ大きな声で言ったとしても流されてしまうことは現実にある。しかし、思っていることを伝えないといけない。

彼らが直面している福島の問題は私たちにはわからないものも多くある。しかし私たちはそんな福島の現状を伝える上演校の思いを受け止め、忘れないようにしたいという気持ちを新たにした。

